

表現リズム遊びにおける児童から表れた動きに関する事例研究

成瀬 麻美

保健体育講座

A case study about the movement that appeared from a child in the expression and rhythm play

Mami NARUSE

Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

N小学校の表現リズム遊びの単元を事例に、教師が提示した題材から児童がどのような動きを表したかを見ていくことによって題材の可能性を考えることを目的とする。「遊び」及び「表現リズム遊び」の特性を整理し、N小学校における「表現リズム遊び」の授業を通して児童から表れた様々な動きを分析し、考察していく。その結果、児童がなりきって表現したときに多様な動きが見られ、児童によって題材から捉えるイメージが異なりそれが動きにつながっていることがわかった。児童も本気で「なりきった」ときに表現する楽しさを体感していた。児童にとって身近で興味を引くような題材であったこと、授業者がその題材の多様な感じを言葉でリードし様々な動きを導き出したことが、児童の多様な表現に繋がったと考えられた。

Keywords：表現運動、遊び、動き

1. 序 論

1) 研究の背景

現在の小学校体育において、小学生の体力の低下傾向や積極的に運動する子どもとそうでない子どもの二極化など、深刻な問題が浮き彫りとなっている（文部科学省，2008）。小学校の体育は、様々な運動領域の基礎を身につける時期で、特に小学校低学年においては各種の運動の基礎を培い（渡邊，2009，p15）、多様な運動経験をさせることが必要である。

そして、2008年の学習指導要領改訂により、小学校低学年の運動領域は、「基本の運動」から各領域に「遊び」という用語が付けられた名称に変更した。「遊び」とは遊ぶこと自体が目的であり、何かの手段ではない。しかし、実際の授業現場では、小学校低学年から技術の教え込み又は放任の遊びなどのように学習指導要領における「遊び」の概念を理解していない様子が伺える。

表現運動領域において小学校低学年では「表現リズム遊び」とされ、「表現遊び」と「リズム遊び」が内

容として示されている。表現遊びとは、「身近な動物や乗り物などのいろいろな題材の様子や特徴をとらえて、そのものになりきって全身の動きで楽しく踊る」であり、リズム遊びは、「軽快なリズムの音楽に乗って弾んで自由に踊ったり、友達と調子を合わせたりして楽しく踊る」（文部科学省，2008）とされている。しかし、表現運動の前段階としてどのような授業をしたらいいのか、現場は困惑している様子が伺える。また先行研究においても表現リズム遊びに関する研究は数少ない。

表現運動は、即興の授業を主軸に多くの教材が開発され多様な動きを創出させている。多様な動きを児童から引き出すためには、題材の選定、教師の言葉かけ、指導力など多くの要素が重要になってくると考える。特に題材の選定は、「子どもたちの発達段階にあった題材を選択し、ふさわしい題を決めて学習を進めていく」（相場，2010b，p58）必要がある。

低学年期の児童は特に「模倣・変身欲求」が強い。変身対象（題材）が児童にとって魅力のあるものであれば、児童は学習活動を活発に行うが、児童にとって

表1 対象授業の単元計画

| 第1時 | 第2時 | 第3時 | 第4時 | 第5時 |
|--|--|---|--|---|
| 【リズム遊び】 ○W - UP ドリル ・先生の真似 【表現遊び】 ○まねっこごっこ ・だるまさん ・鏡 ・体でジャンケン | 【リズム遊び】 ○W - UP ドリル ・先生の真似 ・児童同士の真似 【表現遊び】 ○まねっこごっこ ・だるまさん・鏡 ・体でジャンケン ○なりきりごっこ ・風船 ・ボール ・乗り物 | 【リズム遊び】 ○W - UP ドリル ・先生の真似 ・児童同士の真似 ・自分で動く 【表現遊び】 ○なりきりごっこ ・風船 ・ボール ・花火 ・新聞紙 ○ジャングル探検 ・他の子と関わり合いのある動き(戦い、追いかける等)を表現 | 【リズム遊び】 ○W - UP ドリル ・先生の真似 ・児童同士の真似 ・自分で動く 【表現遊び】 ○なりきりごっこ ・シャボン玉 ・新聞紙・スポーツ ○ジャングル探検 ・他の子と関わり合いのある動きをし、途中で変化をつける | 【リズム遊び】 ○W - UP ドリル ・先生の真似 ・児童同士の真似 ・自分で動く 【表現遊び】 ○ジャングル探検 ・動物やお話を決め、即興的に演じる |

表2 リズム遊びと表現遊びの内容

| リズム遊び | 表現遊び |
|---|---|
| ○W - UP ドリル 1人 音楽に合わせて踊る 2人組 ・両手をつないで スキップ、ジャンプ、左右にステップ、コーヒークップのようにぐるぐる回る、手をつないだまま自転するように回る、トンネルを作ってくぐる、2人で高低差をつける、など ・片手をつないで回る、またをくぐり抜ける、など | ○なりきりごっこ ・風船、ボール、乗り物、新聞紙、シャボン玉などの動きを考えて、そのものになりきって動く。 ・スポーツの表現をスローモーションなど変化をつけて行う。 ○ジャングル探検 ・色々な動物の動きをまねて動く。 ・サイコロを振ってなりきる動物を班ごとで決め、その動物になりきって動く。 ・ときどき事件を起こして変化をつける。 |

あまり魅力のない変身対象であれば、児童は見向きもしてくれない。それ故、教師がどのような題材を選定するかは学習活動を成功させる上で極めて重要な要素となる。

このように題材選定は授業づくりの重要な要素なのではあるが、現実の授業において題材が引き出す児童の動きの内容を実証的に論考した研究は少ない。そのため、どのような題材を設定するとどのような活動が期待できるのかという問題は、教師個人の経験束のレベルに止まったままであり、他者に伝達可能な知識体系にはなっていない。題材の実践において出現する児童の動きや活動の様相を記述する作業は、個人の経験束を共通にする前提となるのである。そのためにはまず、教師が提示した題材から児童が生み出す発想と動きの特徴を明らかにする作業が必要である。

2) 研究目的

本研究では、「表現リズム遊び」を対象に、教師が提示した各種題材から児童が生み出す発想と動きの特徴を対象的思惟の認識態度で観察し明らかにする。そして、題材のもつ学習の可能性と教材価値を児童の欲求充足論、カイヨワの遊び論、エリスの遊戯教育論から検証する。

2. 研究方法

本研究では、ロジェ・カイヨワの「遊びと人間」、M・J・エリスの「人間はなぜ遊ぶのか」という文献を中心に「遊び」の概念や「表現リズム遊び」の特性を整理する。「表現リズム遊び」の特性を整理することによって、動きを検証するためのポイントを押さえることができる。

そして、N小学校における「表現リズム遊び」の授業を事例に、児童からどのような動きが表れたかをみて考察する。ビデオ撮影した映像から個々の動きを抽出し、理論と合わせながら題材の可能性、児童の発想などを検証する。

1) 対象

対象はN小学校2年生の男女23名であり、表現リズム遊びの授業を経験したことがない児童である。授業者は教師25年目のI教師であり、授業者の専門科目は国語である。N小学校は市の教育委員会の研究委嘱を受け、平成21年から2年間、学校体育の研究を進めてきた学校である。教師の体育に対する意欲も高く、児童の身体能力も高いと言える。

対象授業はN小学校第2学年の「表現リズム遊び」の授業である。平成22年10月に実施した授業で、リズム遊びを導入に表現遊びに移行していく5時間完了

の組み合わせ単位である。「リズム遊び」は、表現遊びに入る前に様々な動きを即興的に経験し、表現しやすい身体感覚を養うことが目的である。「表現遊び」は、互いに模倣する「まねっこごっこ」や様々なものになりきる「なりきりごっこ」、様々な動物になる「ジャングル探険」を題材にしている。授業内容と単元の流れは表1の通りである。授業内容や単元の計画段階では筆者も関わり計画を立てた。今回は特に「表現遊び」の動きの分析を中心に行った。活動場所は人工芝のある中庭であり、中央に屋根付きのエリアがありそこをステージとした。

2) 撮影方法

2台のビデオカメラを設置し、全体が映る固定ビデオカメラと近い距離に移動して児童を映すビデオカメラで撮影した。ビデオに映っている映像から児童の動きを抽出した。

また、補助資料として授業後の児童が感想を書く学習カードも考察の手がかりとして用いた。

3) 分析の方法

ビデオ撮りをした映像から児童から表れた様々な動きを抽出し考察する。題材から児童はどのようなイメージをしてこの動きをしたか、児童の興味・関心が高い題材や動きは何かを考えながら、題材の可能性を考察していく。また、「時間・空間・力」(L・ラバン、1985)という観点から動きの特徴を導き出したいと考えている。リズムや間の取り方の「時間」、上下左右、移動するという「空間」の使い方、「力」を抜く、入れるなどこの3つの要素にしたがって分析をする。また、児童には毎時間学習カードを書かせており、その内容も考察の手がかりとして分析の対象に用いた。

3. 「遊び」及び「表現リズム遊び」の特性

新学習指導要領改訂により、小学校低学年の各運動領域に「遊び」という名前がつけられた。遊びとは「ある範囲内では自由に、人真似をゆるさぬニュアンスや解釈の相違によってその個性を表現しうる」(カイヨワ、1990、p16)とカイヨワは述べている。また「強制されて行われるものではなく、ただ楽しいから続けられている」(カイヨワ、1990、p27)とも言っており、規制された中での自由な行為と言える。遊びの空間として「本質的に生活の他の部分から分離され、時間と場所の明確な限界の中で完成した」(カイヨワ、1990、p35)場所とされており、普段の自分とは違う、何か別のものになりきることが大切であると捉えることができる。

また、カイヨワは遊びをアゴーン(競争)、アレア(偶然)、ミミクリー(模倣)、イリンクス(めまい)の4

種に大別している(カイヨワ、1990、p106)。「ミミクリー」とは幻想のなかに身をおき自分の人格を一時的に忘れ別の人格を装うもの、「イリンクス」とは回転や落下などの急速な移動運動のときに感じる肉体的快感、混乱や破壊を喜ぶような精神面での恍惚状態を引き起こすものを言う(片岡、1991、p6)。これらから「ミミクリー」は表現遊びに近く、模倣表現やごっこ遊びが含まれる。そして「イリンクス」はリズム遊びに近く、跳びあがったり回転したりすることによってめまいを感じ、それが楽しいと言える。

表現リズム遊びはこれらの特性を伴って授業を展開する必要があると考えられる。さらにエリスは「教育は創造性とか新しい反応を生み出すための能力を促進しなければならない」(エリス、2000、p223)と述べており、表現リズム遊びの教育における必要性を掲げている。そして、「子どもたちのできる解決に、大人が考える制約や文化的に方向づけられた制約を加えることは、可能な反応を制約することになり、子どもの潜在的な創造性を制限することになる」(エリス、2000、p224)とあるように、活動形態として、教師の一方的指導ではなく、子どもたちの今持っているものを最大限引き出すような手立てを教師がする必要がある。

つまり、表現リズム遊びは、強制せずただ楽しいものではなくはならず、ミミクリーやイリンクスのような要素を含んで指導する必要がある。決められた範囲内で、児童の自由な発想や創造力を最大限引き出すことが表現リズム遊びにおいて重要であると言える。

4. 授業から表れた児童の動きの結果と考察

N小学校第2学年の「表現リズム遊び」の単元を事例に、児童から表れた動きを題材ごとに分け、抽出した。

1) リズム遊びから表れた動き

リズム遊びにおいては、W-UPドリルの授業者の真似をするものと児童同士の真似をするもので分け、動きを抽出し考察した。

(1) 授業者の真似から表れた動き

表2のW-UPドリルの内容を音楽にのりながら授業者が踊り、児童は即座に真似をして踊った。まず授業者が1人で踊っているものを1人で即座に真似をする活動において、ほとんどの児童は先生の動きを真似し、同じように再現していた。しかし、少数ではあるが、教師の動きを誇張させたものやくずしを入れた動きをしている児童がおり、その動きを抽出した。

象徴的な動きをした児童の動きは、表3の通りであり、教師が踊った動きに対してどのように動いたか対

比させた表になっている。

表3から、一定なリズムの教師の踊りから、わざとリズムをはずして動いたりスローモーションで動いたりする児童、空間を大きく使って移動している児童がいた。これらの動きはラバンの「時間」と「空間」の変化に対応していると言える。一定なリズムや空間の踊りから、変化をつけて楽しんでいると言える。また、教師よりも弾みを誇張して動いている女子児童がおり、音楽にのって弾みながら動きを模倣し、リズムダンスの特性でもある「律動の快感」(村田, 2002, p6)に根ざして動いていたと言える。女子の全体的な印象としては、教師の行った動きを忠実に再現している傾向が見られた。女子は教師の動きを大きく変化させることなく先生の決められた範囲内で踊っているように見えた。

表3 教師の動きを真似したある児童の動き

| | |
|-----------------|---------------------------------|
| 教師の動き | ある児童の動き |
| 腕を横で振る動き | 小刻みに速く振る (男子1人) |
| スキップして移動 | スローモーションでその場に滞在している (男子1人) |
| ジャンプして身体を左右にひねる | ジャンプしながら自転 (男子1人) |
| 自分の周りをスキップ | 大きな円を描いてスキップ (男子1人) |
| サイドステップ | 体幹をくねりながらサイドステップ (女子1人) |
| 軽くジャンプ | 膝を曲げて高いジャンプ (女子2人) |
| 左右に身体をねじる | 音楽のビートを全身で刻みながら左右に身体をねじる (女子1人) |
| 胸の前で手を波のように動かす | 頭の上の方で手を波のように動かす (女子1人) |

2人組での教師の真似では、それほど顕著な動きの変化はなかったが、表2に上げた2人組の動きの中でも特に児童が好んで踊っていた動きは、コーヒークップ、手をつないだまま自転するように回る、トンネル作ってくぐる、片手つないで回るであった。これらの動きはカイヨワの「イリンクス」(めまい)に当てはまり、身体的均衡を失わせる動作すべてが含まれる。回転したり、弾んだりする運動は心身の均衡を失わせるおもしろさを持っており、リズムや音楽に満ちた超日常の空間で踊ることによってこうした刺激と興奮に酔うのである(片岡, 1991, p7)。これがリズムダンスの面白さと言え、児童が好む動きの要素であった。

またこのW-UPドリルは、単元の最初の頃は足が止まってしまった児童も多かったが、単元を追うごとに動けるようになっていった。リズムダンスは慣れや訓練することによって、より弾む身体を獲得できる

ようになってくるのではないかと考える。

(2) 児童同士の真似から表れた動き

教師の真似をした後に、児童同士で真似をし合う活動に入った。自分の動きを真似されたい児童を挙手を選び、即興で真似をしていった。挙手して即興で踊った児童から表れた動きは表4の通りである。表4の結果から、男女で比較すると、男子は教師が行っていない動きが多く出ているのに対し、女子は教師が行った動きもしくは前の児童が行った動きをしている数が多い。エリスは「遊びの反応は、本質的には創造的な反応であり、その中では新しい要素と過去の経験とがからみ合っている」(エリス, 2000, p224)と述べているように、過去にした動きを取り入れつつ新しい動きを出すことが遊びであると言える。そのため、男子は遊びの反応に近いと推察できる。女子は教師の動きを忠実に行っていったという点からも今まで経験した動きの印象が強く、即興的に出てきた動きはこれまでの経験が大きく影響していると言える。

表4 児童がステージの上で即興的に出した動き

| | 男 | 女 |
|-------|--|---|
| 1人の動き | 教師が行った動き ・スキップ自転 ・腰をゆらゆら、手で波 ・ジャンプ、スキップ、サイドで手をたたき ・サイドで手を上下に振る ・サイドステップ、手を上でたたき 教師が行ってない動き ・足を広げて手をたたき ・手を上下左右に広げてふる ・サイドで手拍子早く ・上下左右で手たたき | 教師が行った動き ・サイドキック、手を上げてたたき ・手を上でたたきジャンプ ・手を横と上でたたき 前の児童が行った動き ・サイドで手をたたき ・腕を上下に振る ・回旋ジャンプスキップ ・サイドキック、手を上げてたたき 教師が行ってない動き ・ゆっくり手をたたき(アフタービート) ・ジャンプ、ターン(音に合っている) |

2) 表現遊びから表れた動き

表現遊びにおいては、「まねっこごっこ」と「なりきりごっこ」、「ジャングル探検」のそれぞれの教材から、出てきた動きの分析を行った。

(1) まねっこごっこから表れた動き

まねっこごっこの中でも、児童の主体性が最も出ていた「だるまさんがころんだ」に絞り動きを抽出した。ポーズをとりたい人がステージに乗り、他の児童が真似をするという活動形態である。男女別で動きを取り出したところ、表5のようなポーズが抽出できた。

表5から男子は左右対象ではないユニークなポーズをとっているのに対し、女子はブリッジや開脚など柔

軟性を生かしたポーズが多いことが分かった。女子は体操的な要素を含んだ動きを多く取り入れていることがわかった。このクラスは、本単元に入る前に器械・器具を使つての運動遊びをしていたため、その時に経験したブリッジや柔軟を多く表していたと考えられる。女子は授業の間においても側転をしていることが多く、近い過去の経験が大きな影響を与えていると言える。相場（2010b, p58）は「低学年では遠い時の出来事ではなくて、今喜んだり感激したりした『昨日や今日。今、見てきたこと』の中から題材を見つけるとよいだろう」と述べているように、題材も児童の「今」に着目して、見つけることが必要であると言える。

表5 「だるまさんがころんだ」でとった児童のポーズ

| 男子 | 女子 |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・片足曲げて後ろでもつ ・ヒーローみたいなポーズ ・寝転ぶ ・足を上げて下からのぞく ・手を横に広げて片足はパッセでバランス ・下でしゃがむ ・手を前に出してゲー(A君) | <ul style="list-style-type: none"> ・ブリッジ ・座る ・前後開脚 ・横に開脚 ・片手を床について片足上げる(Bさん) ・逆立ち |

(2) なりきりごっこから表れた動き

なりきりごっこから表れた動きは表6の通りである。表6から特に特徴的な動きが表れたものを考察する。

まず風船は、膨らむ動きとして徐々に大きくなって手を広げたり、手で丸を作ったりする動きが多かった(図1、2)。少数のものとして背中を丸めて膨らむ様子を表したり(図3)、2人で手をつないで2人の空間を広げていくことによって丸い空間を表したり(図4)していた児童がいた。また、つま先を持って自分自身が球体になっている児童もいた(図5)。これらのことから、風船が膨らむ感じを自身の身体を小→大と「面積」を意識して表現した児童と、自身の身体や他者と身体とともに「空間」が広がることを意識した児童に分かれたと言える。

しばむ動きは、床にすぐに倒れる児童がほとんどであったが、手を横に広げて回って倒れたりジャンプをしたりして倒れる児童が少数いた。ジャンプも風船が破裂したような感じでジャンプする児童(図6、7)



図1 図2 図3 図4 図5
風船の膨らむときに表れた動き

と丸の形状を保ったままジャンプした児童がいた(図8)。しばむというよりは破裂する動きをしている児童が多かった。また風船を弾ませたときに、ほとんどの児童がジャンプをしていたが男子3名が赤白帽を上に投げて表現していた。

次に自転車の題材では、自転車になりきって大腿部を上げて空間を移動する児童がほとんどであった。その中で1人の男子児童は両手両足を曲げた状態で倒れて硬直しており、自転車が倒れた様子を表現していた(図9)。また女子児童2人は1人が四つん這いになつてもう1人が上に乗っていた(図10)。Bさんが自転車になって、女の子がのっている人になっていたと言える。この2人の女子児童を教師は良かった動きとして取り上げ、その後その動きを真似する児童、傾きながら走る児童(図11)などが増え、多様な動きが出てきた。このように教師からの指示が自転車になってみるといっただけにも関わらず、児童が自転車の様々な状況を考えて動いていた、他の児童と関わりながら表現していたといえる。

そして、先生が新聞紙を扱ってその新聞紙になりきる題材では多様な動きが出てきた。



図6 図7 図8
風船のしばむときに表れた動き



図9 図10 図11
＜自転車の題材から表れた動き＞



図12 図13 図14



図15 図16 図17
新聞紙を折ったときに表れた動き

表6 なりきりごっこから表れた特徴的な動き

| 題材 | 教師の指示 | 児童の発した動き |
|-----|--------|--|
| ボール | 転がる | ・足を曲げて横に転がる ・前転や後転のように転がる ・2人でくっついて回る |
| | 弾む | ・垂直になってジャンプ ・足を引き上げてジャンプ |
| 風船 | 膨らむ | ・両手を頭の上で合わせて丸を作り、大きくなっていく (図1) ・手を上に上げて徐々に大きくなる (図2) ・腹筋をするように起き上がる ・背中を丸めて丸くなる (図3) ・2人組で手をつないで丸をつくる (図4) ・つま先をもって床に転がる (図5) |
| | しばむ | ・床にすぐに倒れる (横向き・寝そべる) ・くるくる回って倒れる ・ジャンプして倒れる (図6, 7, 8) ・人の上に乗る |
| 自転車 | こぐ | ・大腿部を引き上げて移動する ・転がって両手両足固まったまま転がる (図9) ・1人が四つん這いになって1人が上に乗る (図10) |
| 飛行機 | | ・走って背中をついて転がる ・着陸して床に寝そべる ・ヘリコプターのように手を上に上げる |
| 新聞紙 | 移動 | ・手をバタバタさせながら走る ・床を転がりながら移動 |
| | 折る | ・前屈のようになる (図12) ・正座になる ・臀部のみ地面につけて状態と脚を上げる (図13) ・脛脛と大腿部の裏をつける (図15) |
| | 破る | ・ジャンプして倒れる ・2人でくっついている状態から離れる ・体操着のチャックを下げる ・体操着を斜めに伸ばす |
| 忍者 | 手裏剣 | ・お互いにぶつけ合う |
| | 水の上を歩く | 椅子の不安定なところを歩く |
| | 消える | 長椅子の下に隠れる 草の後ろに隠れる 棒の後ろに隠れる |
| | 忍び足 | つま先立ちで歩く |
| | 分身 | 3人で縦になって1後ろの人が出てくる |
| | 煙玉 | 投げて床に入って転がる |

新聞紙を折るという動作では、身体のあらゆる部分を使ってその様子を表現していた。前屈のように状態を倒す動き (図12) が最も多く、臀部のみを地面につけて状態と脚を上げる動き (図13)、ブリッジ (図14) などの動きが出てきた。また図15、図16、図17のように膝や足首の関節を使って新聞紙の屈曲した様子を表している児童もいた。このように新聞紙の折った様子を身体全体で表す児童、身体の関節などを利用して折れた感じを表す児童がいることが分かった。

新聞紙を破るという動作においても、多様な動きが出ていた。身体を引き裂くことはできないため、ジャンプをして倒れることでその様子を表現している児童

が多かった。また女子2名は2人でくっついて離れることで破れる様子を表現していた。また体操着のチャックを降ろしたり、体操着を斜めに引っ張ったりなどして着ているものを利用して表現している男子児童がいた。このように実際には身体でそのものを再現することはできないが、身体でその感じを表現する児童、また他者やものを使って実際に破れた様子を表した児童がいたことがわかった。また、多くの児童が「ぎゃー」と声を発していた。これは新聞紙に自分になりきっていたため、新聞紙が破れたことによって新聞紙の「痛み」が思わず出てしまったと考えられる。

(3) ジャングル探検から表れた動き

ジャングル探検ではワニ、ライオン、ゾウ、ヘビ、トリ、サルの6つの動物になりきって、その動物の様々な様子を表現する題材である。学習指導要領においても「動物」の題材は示されており、実施例も多いといえる。本研究ではそれぞれの動物で出された動きを見ていき、児童はどのようなことを特徴としてとらえ表現していたのかを考察する。

表7はそれぞれの動物において授業者が提示した動きの例である。この様子を見事に説明し、動きのヒントを与えた。さらに授業時間以外に、それぞれの動物の本物の映像を見せ、それぞれの動物のイメージを浮かびやすくさせた。また、「動きの工夫」として、大きく・小さく、ゆっくり・速く、立つ・座る、はう・寝転ぶ、を授業者が提示し、表現が広がる動きの手がかりを事前に与えていた。活動場所は中庭であり、図18のようにそれぞれの動物がいる場所を設定した。それぞれの場所には草や雲、木などの小道具があり、状況が想像されやすいようになっている。ジャングル探検の活動形態として、まず教師リードのもと図18の場所を全員で回り、すべての動物になりきって6種類の動物を経験した。そして、班ごとにサイコロを振り、なりきる動物を決め、1曲（3分程度）の間、その動物になりきって表現する。

表8はそれぞれの動物で表れた特徴的な動きである。

①それぞれの動物から表れた動き

まずワニの表現として、腹ばいになって手を使ってワニの口を表している児童が多かった。中には、手で友達の身体を挟んで互いに食べている様子を表現している児童がいた。

ライオンの表現は、小道具の草の後ろに隠れて4つ足走りで思っきり駆け出してくる動き（図19）をする児童が多かった。中には勢いがありすぎて、そのまま床で転がる男子児童も2、3人いた。背中を地面につけて足をバタバタさせるなど4つ足を意識した動きが表れていた。そして、図21のようにワニのいる沼の水を飲んだりえさを食べたりしている姿が見られ、教師の提示した動きからヒントを得て表したと考えられる。図22、23は互いに速い手の動きでじゃれあったりかみついたりしている様子であり、図24は追っかけている様子である。他者に関わりあうことでしかできない表現を自然としていたといえる。また、ライオンは声を発する児童が特に多く、本物のライオンにより近い状態で表現している様子が伺えた。

ゾウの表現は、片手でくねくねした鼻を表現していた児童が多かった（図25、26）。腕から指先まで意識して細かい鼻の動きを捉えている様子がわかった。また、ゾウの大きな耳を表現している児童もおり（図27）、授業者も考えていなかった意外な着眼点だった。

表7 教師が提示した動きの例

| ワニ | ライオン | ゾウ |
|---|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・はう ・しっぽを動かす ・口をあける ・えものを捕まえる ・えさをとりあう ・泳ぐ | <ul style="list-style-type: none"> ・ゆっくり歩く ・寝そべる ・えさを食べる ・高いところへ上がって立つ ・遠くをのぞく ・じゃれあう | <ul style="list-style-type: none"> ・ゆっくり歩く（前へ 後ろへ） ・鼻を揺らす ・はなでものをつかむ ・えさを食べる ・水あびをする |
| ヘビ | トリ | サル |
| <ul style="list-style-type: none"> ・はう（体をくねらせる） ・まきつく ・とぐろをまく ・いかくする ・舌を動かす ・木に登る | <ul style="list-style-type: none"> ・歩く ・首を動かす、曲げる ・えさをつつく ・お尻（しっぽ）をふる ・羽を広げる ・とぶ ・木の枝にとまる | <ul style="list-style-type: none"> ・歩く（ゆっくりはやく） ・えさを食べる ・手をたたく ・木にのぼる、ぶら下がってわたる ・親子で毛づくろい、歩く（おんぶ・だっこ） |

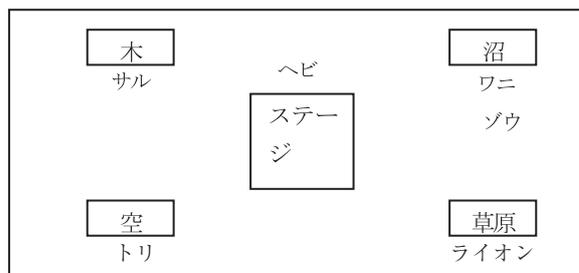


図18 活動場所の配置図（中庭）

表8 ジャングルたんけんから表れた特徴的な動き

| 動物 | 表れた動き |
|------|---|
| ワニ | <ul style="list-style-type: none"> ・腹ばいになって両手を伸ばしてたたく（ワニの口の動き） ・手で人の体を挟む（ワニ同士が食べる） |
| ライオン | <ul style="list-style-type: none"> ・4つ足走り（図19） ・草に隠れて4つ足で思っきり出てきて転がる ・水を飲む、餌を食べる（図21） ・2人組で取っ組み合う（図22、23） |
| ゾウ | <ul style="list-style-type: none"> ・しゃがんで片手をくねくねさせる（図25、26） ・大きな耳を手で作る（図27） |
| ヘビ | <ul style="list-style-type: none"> ・匍匐前進のように腹ばいになって動く（図31、32） ・仰向けで手で頭を抱えて膝を立てくねくね動く（図33） ・ベンチを使って動く（図34、35） |
| トリ | <ul style="list-style-type: none"> ・両手を広げて手をバタバタさせて歩く、走る（図36、37） ・両手を口に当てて動く（嘴の表現） ・腕を背中の方に納めて休んでいる様子（図38） ・ベンチに乗って、そこから飛び降りる（図39、40） |
| サル | <ul style="list-style-type: none"> ・4つ足で動く（図41） ・綱渡りをする ・バナナにむしゃぶりつく ・じゃれあう（図44） |



図 19 図 20 図 21



図 22 図 23 図 24

ライオンの様々な動き



図 25 図 26 図 27 図 28



図 29 図 30

ゾウの様々な動き



図 31 図 32 図 33



図 34 図 35

ヘビの様々な動き



図 36 図 37 図 38 図 39 図 40

トリの様々な動き



図 41 図 42 図 43 図 44

サルの様々な動き

図 29 は木の下で木の実を食べている様子であり、「ゾウできのみを食べた」と学習カードに書かれていた。木の下にいき木の実を食べていることを考えて動きに移していた。

ヘビの動きは、ほとんどの児童が匍匐前進のように腕を使って動いていた(図 31、32)が、女子児童 1 名は仰向けになり手で頭を抱えて膝を立てくねくね動いていた(図 33)。胴体の伸縮を使ってヘビのうねうね動く感じを表現していたと思われる。この動きは学習カードの「友達よかった動き」で評価されており、他の児童も認めていた。

また、ベンチを利用してベンチの上や下で動いたり(図 34)、頭からベンチを降りたりして(図 35)、ヘビのまきつく様子をモノを使ってうまく表現していた。

トリの動きは、両手を広げて上下に手を振りながら走っている動き(図 36)が多かった。これははねを広げて空を飛んでいる様子を表現していたといえる。また木の枝に止まっていたり歩いたりしているときは羽を休めており、その様子を手を後ろに持つことで表現していた児童もいた(図 38)。空を飛ぶときと休んでいるときの細かな特徴をとらえて表現していたことが分かった。

そして、ベンチにのってそこから手をバタバタさせながら飛び降りる動き(図 39、40)もしており、空を飛ぶというイメージにより近い状態になるためにベンチを使用し飛ぶ様子をリアルに表現していた。また、手で嘴を作って落ち葉を集めている児童もおり、トリの様々な特徴をとらえて表現していた。最初の方は手を広げて歩く動きが多かったが、授業を重ねていくことによって多様な動きが出てきた。これは授業者が少人数の動きをほめたことによって、他の児童も様々な動きを出したといえる。

サルは小道具のバナナの木があったためか、バナナの木にむしゃぶりつく児童が多かった。しかし、顔もサルになりきって移動したり(図 41)、綱渡りをしたりサル独自の特徴をとらえていた。そして、バナナをとって他の児童に食べさせたり、じゃれあったり他の児童と自然と関わり合いを持っていた。

教師がその状況のヒントを与えたということもあり、それぞれの動物の特徴をつかんで、速度を変えたり、空間を移動したり、他者と関わったりして多様な動きを出していた。特に地面人工芝ということもあり、寝転ぶ動きが多かったように見えた。

②関わり合いから表れた動き

サイコロを振り班ごとで動物を決め 1 曲の間その動物になりきって表現した。曲の始めはそれぞれの場所でそれぞれの動物になりきって表現していたが、20 秒もたたないうちにその場所を離れ、他の動物と関わり合う姿が見えた。児童の学習カードの中にも「ライオンがワニにかたないから群れでいった」「どうぶつ

はたべたりたべられたりしてきけんなか生きているのがわかった」「ライオンでゾウに水をかけられガードした」などの記述があり、自分たちで様々な状況や物語を考え、自然と他の動物と関わり合う動きが生まれていた。互いに戦ったりじゃれあったり、ライオンがトリを追っかけたり、サルとゾウが戦ったり、ゾウがワニのところへ行行って水をかけたりなど想像を超えるような関わりを即興的にしていた。エリスは他者と即興的に関わることに、「個人の行動の自由は縮小するが、しかし、他方においてはひとりぼっこの個人では入手できない覚醒の相互作用の可能性を増大させるような状況が生まれる」(エリス,2000,p246)と述べているように、他者の即興的な動きによって、新たな動きの発生につながったといえる。即興表現は、他人が仕掛けてくる偶然のアクションに反応し、予想もつかない偶然のおもしろさを潜めている(片岡,1991,p8)と言える。これは、カイヨワの「アレア」(偶然)の遊びの性質に合致したものであると言える。

3) 表れた動きから考える題材の可能性

児童の学習カードから「いろんなものをまねするのはすごくたのしい」「動物になったところがおもしろかった」などの記述があり、多くの児童がなりきりごっこやジャングル探検を好んでいる様子が分かった。筆者が授業を観察して感じたことは、リズム遊びではおしゃべりが多く落ち着きがなかったのに対し、表現遊びでは児童がいつの間にかその気になってそのものや動物になりきっていた。ある児童の学習カードから「いろんなものの動きのまねっこで思いっきりなりきったのですごくおもしろかった」とあり、なりきるものに児童が興味をもち、自然とそのものに夢中でなりきれたことがこの感想につながったといえる。これは、授業者が児童の興味・関心がある題材を選定したこと、そして表現のその気にさせる指導が上手だったことが考えられる。

小学校は学級の児童と接している時間が長く、児童の「今」を教師はつかみやすい。相場(2010a)は「子どもと教師が前とは違った自分を見出すことが究極のゴール」で「子どもたちにとって一番問題になっていることを動きにする」と述べているように、授業者が設定した課題に児童が合わせるのではなく、題材やゴールは児童から学んでいくものであるということが分かった。そして、授業者の専門科目は国語であり、言葉の使い方、感じの込め方が得意だったために児童もその世界に入り込めたといえる。児童の興味・関心のある題材を決め付けるのではなく、今日の前にいる児童を見て、題材を選定しその題材から個人を活かすような授業が表現運動では必要であるとわかった。

4 まとめ

第2学年の「表現リズム遊び」の授業を通して、表れた動きの特徴は次の通りである。

「リズム遊び」では、カイヨワの「イリンクス」(めまい)をともなった回転の動きを児童は好み、繰り返し動いていた。男子は「空間」や「時間」に変化をつけ、教師からの動きを変形させて動いている人がいたが、女子は経験した動きを忠実にする傾向があった。

「表現遊び」では、なりきる題材の動きのイメージが様々で、そのイメージが動きに反映していた。大きくなっていく様子を「面積」で表す児童、「空間」で表す児童、新聞の折れた様子を身体全部で表す児童、関節で表す児童などイメージの捉え方で動きに変化が出てきた。そして、授業者が児童のある動きを評価し皆に紹介したことで自然と様々な動きが広がった。ジャングル探検では、動物の特徴を捉えて、より本物らしく動き自然と素早い動きや床を転がるような動き、身体をねじる動きが出てきていた。なりきる動物を決めて自由に活動するときに、その動物の活動場所を離れ様々な場所で色々な動物と関わっていた。即興だからこそ、他者との関わりが偶然が生まれ、1人では出来ない動きを発生させたと言える。これはカイヨワの「アレア」(偶然)のおもしろさだと言える。

以上のように児童がそのものになりきって表現したときに想像を超える動きが表れていた。なりきって表現したことによって児童も表現する楽しさを体感した。これはその児童たちがその気になってなりきれる題材であり、授業者がその題材の多様な感じを言葉でリードし様々な動きを導き出したと考える。

今回はある題材から遊びの中でどのような動きが表れたかを分析し題材の可能性を見ていったが、題材だけではなく、授業者の指導力、特に言葉の使い方が重要であることがわかった。そのため今後は指導言語を中心に、言葉の質感、間合いなども見ていくことで表現運動の広がりを持たせることができるのではないかと考える。

【引用・参考文献】

- 1) 相場了(2010a), 子どもが教えてくれる 柔軟なゴール, 女子体育, 52(4):6-9.
- 2) 相場了(2010b), 小学校表現運動の学習指導 今を生きる子どもたち, アイオーエム, 東京.
- 3) 舞踊教育研究会, 片岡康子編(1991), 舞踊学講義, 大修館書店, 東京.
- 4) エリス・M・J, 森林, 大塚忠剛, 田中亨胤訳(2000), 人間はなぜ遊ぶか, 黎明書房, 愛知.
- 5) カイヨワ・R, 多田道太郎・塚崎幹夫訳(1990), 遊びと人間, 株式会社講談社, 東京.
- 6) 國土将平(2010), 動きのよい子を育てる「学校環境づくり」と子どもの遊び, 体育科教育, 58(7):22-25.

- 7) 文部科学省 (2008), 小学校学習指導要領解説 体育編. 東洋館出版社, 東京.
- 8) 村田芳子 (1998), 楽しい表現運動・ダンス. 小学館, 東京.
- 9) 村田芳子 (2002), 楽しい リズムダンス・現代的なリズムのダンス. 小学館, 東京.
- 10) 村田芳子 (2003), 表現運動からみた動作の評価. 体育の科学, 53 (1) : 18-23.
- 11) 長町裕子 (2010), 表現運動のよい動きを育てる「習得」「活用」の学習活動. 体育科教育, 58 (7) : 50-53.
- 12) ラバン・L (1985), 身体運動の習得. 白水社, 東京.
- 13) 渡邊彰, 今関豊一 (2009), 小学校新学習指導要領の展開 体育科編. 明治図書出版株式会社, 東京.